

作家の肖像

第 17 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



山口蓬春
1893-1971

やまぐち・ほうしゅん
1893年北海道生まれ。日本画家。
東京美術学校(現 東京藝術大学)
西洋画科入学後、日本画科に転
科。松岡映丘に師事し、大和絵
を習得。1926年、「三熊野的那智
の御山」で帝展特選、帝国美術
院賞。西洋画と日本画を融合さ
せた「蓬春モダニズム」とよばれ
る独自画風を確立した。65年文
化勲章受章。71年、77歳自宅で
死去。91年山口蓬春記念館開館。

クールで、ユーモラス

暗い収蔵庫の中、一人静かに作業
をしていると、ぽかんとこの絵が浮
かんできました。3体の埴輪が描か
れた「宴」^{うたげ}。私がまだ学芸員として駆
け出しだったころ、慣れない手つき
で展示作業をしながら、幾度も目に
した作品です。当時、日本画への関
心は薄かった私ですが、いつもこの
絵を見て、慰められたような気持ち
になっていました。

蓬春さんのもつ色彩感覚というの
は、非常に温度が低いもの。触覚的
に「ひやっ」と感じるのですが、そ
れと同時に、どこかユーモラスな印
象も抱かせる。色彩としてはクール
でありながら、心ませる絵でもあ
るのです。

観る、感じる、知る

デッサンというのは、西洋画の世
界ではそれ自体が作品として鑑賞の
対象にもなり得ますが、日本画では、
そうではありません。日本画には写
生があり、写生はどこまでいっても、
本画制作のための準備段階に過ぎな
いのです。

蓬春さんは、完全な写生に至るた
めには、観たまま、感じたまま、知
ったままを、残らず描き込まなけれ
ばならない、と著書の中で述べてい
ます。つまり、視覚的な表面の模写
にとどまらず、自身の感情の動きに
よる主観的な解釈を加え、さらに美
を構成する要素が何であるかという
知的分析を加えて構成していく、と
いうわけです。

蓬春さんは、新しい表現を模索し
続け、従来にない日本画の形を開拓
した画家の一人。洗練されていて、

さわやかで、センスのいい人、とい
うのが私のもつ印象です。

ただ、誤解を恐れずに言えば、蓬
春さんの絵には、どこか物足りなさ
を感じてしまうところもあります。
きれいで、行儀が良くて、落ち着い
ていて——。あまりに混沌とした現
代に生きる私たちからすると、蓬春
さんの絵の世界観には、少しなじま
ない部分もあるのです。

一方、だらしない現代だからこそ、
蓬春さんの清澄な世界に浸っていた
い、という気持ちもあります。もち
ろん、これは贅沢な要求でしょう。

会って、話してみたかった

80年代の初め、蓬春さんの亡き後、
春子夫人が、当時私が勤めていた神
奈川県立近代美術館を訪れ、蓬春さ
んが愛読していた書籍やデッサンを
寄贈されました。書籍は2万冊を超え、
永井荷風の著書や、マティスの版画集
「ジャズ」などがあったのを覚えてい
ます。蓬春さんがたいへんな蔵書家
であり、多彩な方面から影響を受け
たことがうかがえました。

作品を見るだけでなく、ぜひ一度、
お会いして言葉を交わしてみたかつ
た——。そう思わせられる絵であり、
画家です。実際に会ったとしたら、
蓬春さんは自慢話なんかはしないで
しょう。率先して、絵について説明
することもない。ただ、豊かな沈黙
に包まれている。そんなふうと思う
のです。(談)

酒井 忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』代表著者。



「つつじ」

紙 鉛筆、色鉛筆、水彩 34.6×51cm 制作年不詳

山口蓬春記念館蔵

生前は自邸の庭園に季節の草花を育て、写生にいそしんだという。写生は、
表面の模写にとどまらず、感動や分析が包括されなくてはならないとした。
※新版教科書「美術1」のP.13に掲載



左／「宴」

紙本彩色 91×135cm 1960年 神奈川県立近代美術館蔵
青空を背景に、優しく微笑む3体の埴輪を描いた作品。
茨城県下妻市で実際に出土した埴輪から着想を得た。

右／「望郷」

紙本彩色 142×90cm 1953年
日本画に西欧美術の感性を加えた「蓬春モダニズム」の代表作の一つ。
上野動物園のホッキョクグマを写生し、描き上げたと言われる。

